

大阪文化財センター調査報告 XXXI

(財) 大阪文化財センター  
大坂城跡発掘調査事務所

太子町西山地区特定土地区画整理事業  
予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書



昭和 54 年 3 月

財団法人 大阪文化財センター

大阪文化財センター蔵書

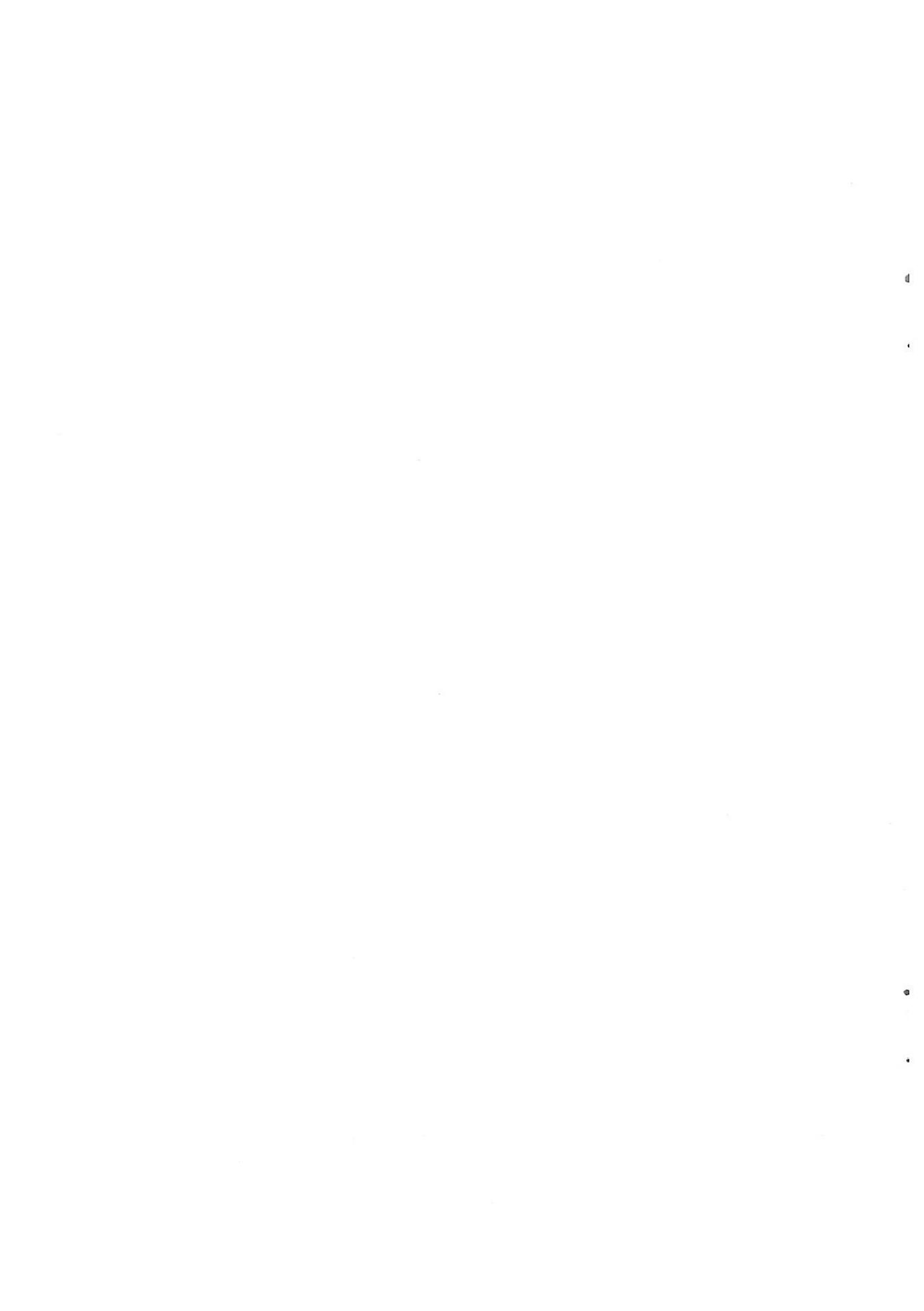
太子町西山地区特定土地区画整理事業予定地内  
埋蔵文化財試掘調査報告書 正 誤 表

頁	箇 所	誤	正
挿図目次	1 行 目	遺物分布図	遺跡分布図
1	23 行 目	北 <u>東</u> 方向	北 <u>西</u> 方向
17	2 行 目	<u>調査</u>	詳細

## 例 言

- 1) 本書は、財団法人大阪文化財センターが、昭和53年度に太子町の委託を受けて実施した大阪府南河内郡太子町大字太子、春日に所在するチンチの森他遺物散布地4ヶ所の試掘調査報告書である。
- 2) 調査および本書作製にあたっては、太子中学社会科クラブの諸君に種々の協力をいたしました。記して謝意を表わします。
- 3) 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作製すると共に、カラースライドも多数作製した。広く利用されることを希望したい。
- 4) 発掘、遺物整理及び報告書作製は下記のものが担当した。

業務課第3係長 酒井龍一、技師 舟山良一  
技師 国乗和雄  
総務課普及係技能員 立花正治（写真担当）
- 5) 第1図の調査地と周辺の弥生時代遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「大阪東南部」、「五条」を複製使用した。
- 6) 本文中のレベルは、全て東京湾平均海面水位（T.P）である。



# 太子町西山地区特定土地区画整理事業 予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書

## 目 次

### 例 言

[ I ]	調査に至る経過	(舟山良一)	1
[ II ]	位置と環境	(国乗和雄)	1
[ III ]	調査の目的と方法	(舟山良一)	5
[ IV ]	調査の結果	(舟山, 国乗)	6
[ V ]	ま と め	(国乗和雄)	17

## 挿 図

第1図	調査地と近辺の弥生時代遺物分布図	2
第2図	調査地周囲の地形 (1/10000)	3
第3図	トレンチ配置図	5
第4図	No.36-1 トレンチ断面模式図	6
第5図	No.36-2 トレンチ断面模式図	6
第6図	No.36-3 トレンチ断面模式図	7
第7図	No.36-4 トレンチ断面模式図	7
第8図	No.36-5 トレンチ断面模式図	8
第9図	No.36-6 トレンチ断面模式図	8
第10図	No.37-1 トレンチ断面模式図	8

第11図	No.37—1 トレンチ遺構実測図	9
第12図	No.37—1 トレンチ表面採集遺物実測図	9
第13図	No.38—1 トレンチ断面模式図	10
第14図	No.38—2 トレンチ断面模式図	10
第15図	No.38—1・2 トレンチ出土遺物実測図	10
第16図	No.34—1 トレンチ1号住居跡実測図	12
第17図	No.34—1 トレンチ出土遺物実測図	12
第18図	No.34—2 トレンチ実測図	13
第19図	No.34—2 トレンチ2号住居跡実測図	14
第20図	2号住居跡内ピット1	14
第21図	No.34—2 トレンチ出土遺物実測図	15
第22図	No.42—1 トレンチ断面模式図	15
第23図	No.42—5 トレンチ断面模式図	16
第24図	No.42—10 トレンチ断面模式図	16
第25図	No.42—13 トレンチ断面実測図（部分）	16
第26図	No.42—13 トレンチ出土遺物（3, 7）・No.42地点表面採集遺物実測図	17

## 図 版

図版1	調査地遠景 No.36・37・38地点	図版8	No.34—1 トレンチ・1号住居跡
図版2	調査地遠景 No.34・42地点	図版9	No.34—2 トレンチ・2号住居跡
図版3	No.36—1・2 トレンチ	図版10	No.42—1・5・11 トレンチ
図版4	No.36—3・4 トレンチ	図版11	No.42—13 トレンチ
図版5	No.36—5・6 トレンチ	図版12	No.37・38地点出土・表面採集遺物
図版6	No.37—1 トレンチ・落ち込み	図版13	No.38・34地点出土遺物
図版7	No.38—1・2 トレンチ	図版14	No.34・42地点出土・表面採集遺物

## [ I ] 調査に至る経過

現在、太子町は大字太子・春日所在の西山地区において特定土地区画整理事業を計画している。

しかし、当該地には既に周知されている5ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することから太子町は、事業実施面における遺跡の取り扱いについて大阪府教育委員会と協議を行なってきた。その結果、大阪府教育委員会では、事前に遺構等の存在の有無、範囲確認のための試掘調査が必要であることを回答した。

この回答により、太子町は試掘調査を当大阪文化財センターに要請した。当センターはこれを受けて太子町と調査方等について数回にわたり協議を重ねた。そして、昭和54年1月30日付をもって、両者の間で調査の委託契約を締結した。この契約に基づき、当センターが同年2月1日より3月15日まで試掘調査を実施した。

## [ II ] 位置と環境

試掘調査を実施した大阪府南河内郡太子町は、東を奈良県北葛城郡香芝町と当麻町とに接する大阪府東部の山手に位置しており、町域内の多くを山野が占める田園都市である。

太子町の地形は、大阪府下では最高峰を有する金剛葛城山地が東にみられ、古代より多くの詩歌に詠まれ、その特異な形で知られた二上山も一峰としてそびえている。西には和泉山地に源を発し、大和川に流れ込む石川と石川の氾濫によって形成された南北方向の平坦地が羽曳野丘陵との間に広がっている。また、北には二上山より北東方向に派生し、サヌカイト等の火山岩系統の石材を産出する春日山、寺山の丘陵がみられ、南には葛城山より北西方向に尾根が張りだしている。

調査地付近は、太子町内では北西部にあたり、難波と大和を結ぶ古代よりの街道として知られた竹内街道(現在の国道166号線)や近鉄南大阪線が通る春日山、寺山南西麓の飛鳥川沿いの北側の谷と、飛鳥川同様、石川の一支部である



- ① 玉手山遺跡      ⑤ 東阪田遺跡      ⑧ 壺井遺跡      ⑪ 東山遺跡  
 ② 五十村・駒ヶ谷遺跡      ⑥ 喜志遺跡      ⑨ 御嶺山遺跡      ⑫ 山城遺跡  
 ③ 上堂遺跡      ⑦ 粟ヶ池遺跡      ⑩ 葉室西峰遺跡      ⑬ 西山地区調査地  
 ④ 高屋遺跡

第1図 調査地と近辺の弥生時代遺跡分布図



第2図 調査地周囲の地形 (1/10000)

南側の太井川に挟まれた独立丘陵状地形の東斜面にあたる。

調査対象地は比較的やせた尾根及び急傾斜の谷部からなり、石川近辺と尾根頂部との比高差は約50~60mである。また、このあたりの地質は、金剛葛城山地の主要層である花崗岩層とは異っており、礫、砂、粘土がサンドイッチ状に堆積する大阪層群より形成されている。

周辺部の自然環境は以上のように地形の変化が微妙なことから、人間の居住

環境としては適していたことがうかがえ、その環境の下で豊かな歴史を古くからもっていたことが、付近に点在する遺跡から知ることができる。

まず、旧石器時代の遺跡としては前記二上山北西麓産のサヌカイトを用いた石器類の散布が羽曳野市飛鳥付近で多数認められている。しかし、縄文時代に入ると人々の生活はこの付近より少し離れた富田林市の錦織遺跡が認められているに過ぎない。

この過疎化の影響は弥生時代に入っても続き、調査地西方約2.5kmの石川左岸の段丘上に存在する喜志遺跡が前期～後期にわたる遺跡として出現し、中期には調査地の北西約1.5km付近の丘陵末端部の壺井遺跡や南西約2.5kmの山城遺跡等が存在するに過ぎない。しかし弥生時代後期になると様相は一変し数多くの遺跡が出現する。石川左岸の段丘上では、上堂、高屋、藏之内、東阪田、尺度、粟ヶ池などの遺跡が存在し、石川右岸には玉手山、五十村・駒ヶ谷、御嶺山、西山（当該調査地）、葉室西峰、東山などの遺跡が丘陵部に存在する。なお、弥生時代後期の遺跡の多くは遺物の散布地として知られているが、調査の実施されたものは東山など過半にしか過ぎず、遺構等の詳細は不明なものが多い。

古墳時代に下ると、前期は当調査地の北4kmの玉手山丘陵付近に10数基の古墳、当調査地の西約1.5～2.0km付近の石川に面した丘陵端部には丸山、御旅山、九流谷の古墳が並んで築かれ、中期には北にやや離れた古市古墳群、そして後期～終期に入ると通称磯長谷の王墓群とよばれるよう多くの大規模の古墳が太子町内には点在する。また、近辺には飛鳥千塚、東山遺跡と重複する一須賀古墳群などの群集墳が築かれた。ただ、これらの古墳等の存在は明らかであるが、これらを築造した集団の住居跡等の存在はあまり把握されていないのが現状である。

以上、古墳時代以前に限って遺跡を挙げたが、その後の時代とされる遺跡も近辺には多数存在しており、今後の調査に期待が寄せられている地域である。

### 〔III〕調査の目的と方法

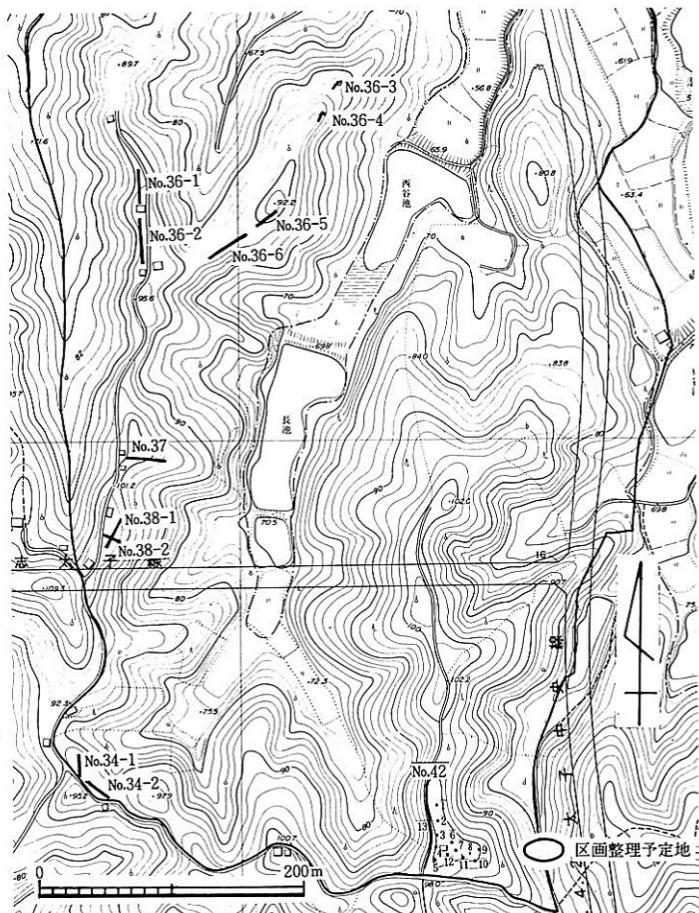
西山地区特定土地区画整理事業予定地は、標高43～100mの丘陵地であり、現在では田・畑・山林・溜池・堤・原野・雑種地といった地目で構成されているおよそ36.15haにも及ぶ広範な土地である。

また、当該地に存在する遺跡は『大阪府文化財分布図』(昭52.3)によれば、遺跡番号太子町の34・36・37・38・42（チンチの森遺跡）であり、尾根を中心にして弥生時代後期の土器片が散布していることから知られた遺跡である。

しかし、現在は既にブドウ畠・みかん畠として開墾され、肥料穴も多く掘られており、遺構の残存状態がどれほどのものか危惧されたところであった。従って、今回の試掘調査

の目的はまず遺物の出土状況、包含層、遺構の有無を確認することであり、次に遺跡の範囲を知ることであった。

上記の目的を果たすために、各埋蔵文化財包蔵地にトレンチを設定することにしたが、その大部分が現在も果樹を栽培中であるため、土地所有者の立会の下に、果樹の間をぬって、トレンチを設定することもあった。従って、トレンチの長さ、幅等について制約を受けた



第3図 トレンチ配置図

部分がかなり多かった。トレンチの名称・規模は以下の通りである。

遺跡番号	トレンチ名	トレンチ幅(m)	トレンチ長(m)
No.34	No.34—1 —2	1.5 〃	18.0 21.5
No.36	No.36—1	〃	27.0
	2	〃	34.0
	3	〃	7.0
	4	〃	8.5
	5	〃	20.0
	6	〃	33.0
No.37	No.37—1	〃	29.0
No.38	No.38—1	〃	24.0
	2	〃	16.0
No.42	No.42—1～12	1.0	1.0
	13	0.5	66.5

## 〔IV〕調査の結果

### No.36地点

区画整理予定地内西側を北に延びる尾根は、西谷池の西方で、そのまま北に延びる主尾根と、北東へ向かう支脈とに分かれる。主尾根上にはほぼ一直線にNo.36—1・2の2本のトレンチを、支脈上に尾根先端部から基部にかけてNo.36—3～6の4本のトレンチを設定した。

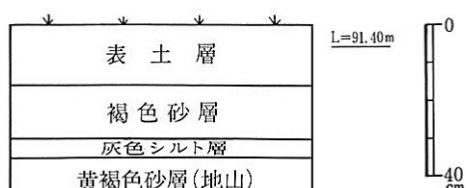
#### No.36—1 トレンチ

標高約92m付近に幅1.5m、長さ27.0mの規模で南北方向に設定したトレンチである。



第4図 No.36—1 トレンチ断面模式図

厚さ約20cmの表土をはぐと、黄褐色砂質土層の地山となる。北側が斜面にかかるが、そこでは表土下に暗褐色砂質土が約20cmの厚さで堆積している。



遺構、遺物の検出は認められなかった。 第5図 No.36—2 トレンチ断面模式図

#### No.36—2 トレンチ

No.36—1 トレンチの南延長上に幅1.5m、長さ21.5mの規模で設定したトレン

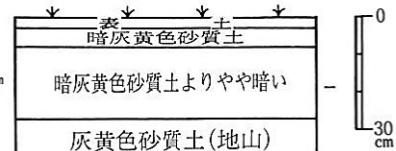
チである。標高は約92mである。

ブドウの肥料穴が数多く掘られていて、層序のはっきりしない部分が多いが、表土並びに耕作土が20~50cmあり、その下は黄褐色砂の地山となる。表土・耕作土の厚い部分があるが、開墾時の地ならしの結果であると思われる。表土と地山の間に褐色砂層、灰色シルト層の分離できる部分が4m程の長さにわたって観察できた。

遺構は検出されなかったが、遺物としては弥生式土器片2個が出土している。

#### No.36—3 トレンチ

土地区画整理事業予定地の東、西両端  
 $L=81.40m$   
に南北方向の2本の尾根が存在するが、



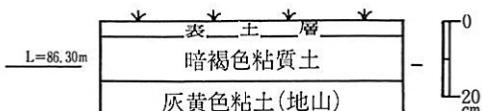
その間の谷部には西谷池がある。トレンチは池の真西の尾根上にあり、上の太子方面への視界はたいへん良好なところである。

トレンチは標高81.6mの小さな平坦面に、長さ7m、幅1.5mの規模で設定した。

地表から地山面までの厚さは約15~30cmあり、表土、暗灰黄色砂質土、暗灰黄色砂質土よりやや暗い層の順で堆積していた。遺構、遺物の検出は認められなかった。

#### No.36—4 トレンチ

No.36—3 トレンチの南25m付近に設定  
 $L=86.30m$   
したトレンチで標高は約86.4mである。



トレンチは、付近の地形にあわせてL字形とし、延長8.5m、幅1.5mのものを設けた。

地表下約15~30cmで堅い灰黄色粘土の地山面となる。地山面との間には、表土と暗褐色粘質土が堆積するが遺物の包含はなかった。また遺構の存在も認められなかった。

#### No.36—5 トレンチ

No.36—3~6 トレンチが並ぶ尾根上では当トレンチの北付近で最も標高が高くなっている、91.2mある。トレンチは、尾根稜線よりやや東に振った所に全長20.0m、幅1.5mで設定した。頂部に近い北端と、南端との比高差は約2.7m

あり、北端では地表面より地山の黄褐色砂質土までは、表土、灰黄色土の順で30~50cmの厚みを持つが、斜面下の南端では、北端とは異った層が3層にわたって堆積しており、厚さは80~120cmにも達する。

このような厚みのある堆積のしかたは、住居跡の検出をみたNo.34-2トレンチと類似していたが、遺構、遺物等は認められなかった。

#### No.36-6トレンチ

No.36-5トレンチのすぐ南側にある標高約88.6mのほぼ平坦な尾根上に、長さ33.0m、幅1.5mで設定した。

トレンチ全体を通してほぼ一様な土層の堆積状態がみられ、地表面より地山面の黄褐色砂層までは、約20~60cmの厚さである。地山面で肥料穴を数ヶ所で認めたが、遺構、遺物の検出は認められなかった。

#### No.37-1トレンチ

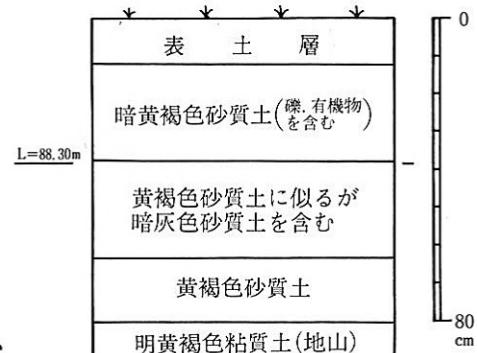
区画整理予定地区内西側を北に延びる尾根は長池西方でやや東に張り出している。標高は最高所で約100mである。この付近がNo.37地点である。トレンチは東に張り出した部分に、幅1.5m、長さ29.0mの規模で東西方向に設定した。

No.36-2トレンチの南約150mである。

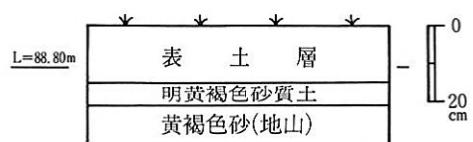
基本的な層序は、表土と暗褐色砂層が20~30cmの厚さで堆積し、その下が淡褐色の地山となっている。

遺構としては、2ヶ所で落ち込み(ピット)が検出された。

トレンチ西端から東約6mの位置で検出された落ち込みは、平面の形状が直径約70cmの不整円形を呈し、その深さは約1mを測る。埋土は暗褐色の砂礫で、



第8図 No.36-5トレンチ断面模式図



第9図 No.36-6トレンチ断面模式図



第10図 No.37-1トレンチ断面模式図

炭をごく少量含み、周囲の地山（砂）よりよくしまっている。遺物は埋土中上位から後期と思われる弥生式土器片数点と、サヌカイト片が出土した。

更に、この落ち込みから東へ11mの地点、即ちトレンチの中央部やや東寄りでピットが検出された。砂層下の状態を観察する為に設けた小トレンチ壁に、その断面が現われて判明したものである。平面の形状はほぼ円形で、その径46cm、深さ55cmである。埋土は暗褐色砂で、中から弥生式土器片2点が出土した。

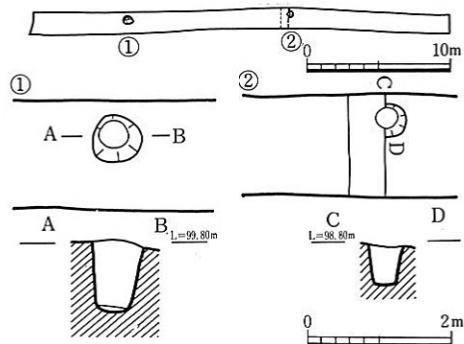
このピットの検出によって、周囲にもピットの存在が予測されたので、トレンチ内を精査したが、当該トレンチ内においては認められなかった。

これらの遺構の性格を把握することは、周囲の調査によらなければ難かしいが、西側の落ち込みは、柱穴としては、規模が大きすぎると思われる。東側のピットは、あるいは高床倉庫、掘立柱建物または竪穴住居跡等の柱穴に相当するものかもしれない。

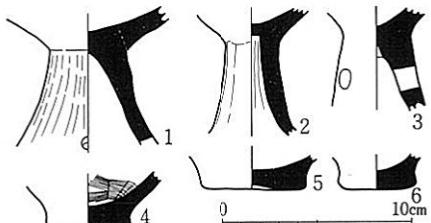
トレンチ内、遺構内からの遺物は弥生式土器片とサヌカイト片であったが、その量は少なく、また、図示できるようなものもなかった。しかし、トレンチ北側の東斜面から比較的多くの弥生式土器を採集できたので、それを図示した。

高杯と器種不明の底部である。高杯は、胎土はやや粗い粒子を含むが比較的精良であり、淡褐色または赤味が強い褐色を呈する。脚内面にシボリ痕が残り、外面は、明瞭ではないが刷毛目調整を施している。

底部は胎土に粗粒子を含み、赤味の強い褐色または暗褐色を呈する。調整は器面が磨滅しているためよくわからないが、底部内面に刷毛目調整を施したものが見られる。底部がやや凹むものが多い。



第11図 No.37-1 トレンチ遺構実測図



第12図 No.37-1 トレンチ表面採集遺物実測図

### No.38-1・2 トレンチ

西谷池、長池が並ぶ土地区画整理事業

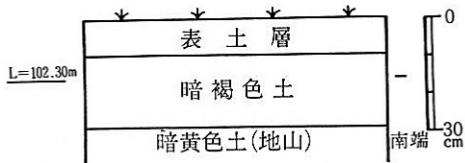
中央部谷筋の西側尾根の稜線よりやや東寄り付近に十字形に設定した。南北方向のものをNo.38-1 トレンチ、東西方向のものをNo.38-2 トレンチとした。現状はブドウ園である。

No.38-1 トレンチは、長さ24m、幅1.5mの規模で設定した。設定場所は、南が高く北が低い傾斜地で、標高は南端では102.5m、北端では100.7mとなる。

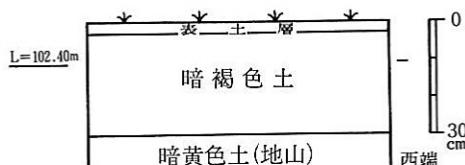
基本的な層序は、地表下約5~15cmでは表土が、その下には暗褐色土が地山面までの間に堆積する。暗褐色土の堆積は、2トレンチと交差する付近では20~30cmであるが、北端の斜面下方では30~40cmとやや厚くなっている。

遺物は、表土及び暗褐色土層より後期の弥生式土器と石器が出土した。弥生式土器は、第14図の1~3、5、7、10~12などが代表的なものであるが、その殆んどは小片のため器形、整形法などは詳しくは知りえないが、器形は、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などで、甕形土器の胴部より底部にかけては、叩きを施すものが多い。また全般にそれらの胎土は細礫を含むものが多く、器壁は風化によって荒れたものが多い。石器は鶏卵形をしており、表面の摩滅程度などから磨石と考えられる。また片方の頂部には、使用痕が認められた。

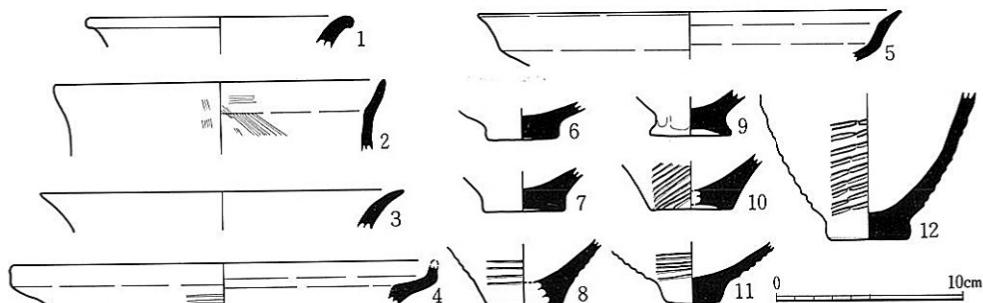
以上、遺物の検出を認めたことから遺構の存在を期待したが、地山の暗黄色



第13図 No.38-1 トレンチ断面模式図



第14図 No.38-2 トレンチ断面模式図



第15図 No.38-1・2 トレンチ出土遺物実測図

土が軟弱なことや、ブドウ根による障害のため、確認することはできなかった。

No.38—2 トレンチは長さ16.0m、幅1.5mの規模で設定した。1 トレンチ同様、比較的急な傾斜面に設定した為、標高は西端部で102.8m、東端部では100.3mあり、その比高差は約2.5mである。

基本的な層序としては、1 トレンチとほぼ同様な堆積順序になっており、表土が約10cm、暗褐色土がその下に、35~50cm堆積する。遺物も1 トレンチとほぼ同様で、表土と暗褐色土層より後期の弥生式土器片が10数片出土した。遺物は、特にNo.38—1 トレンチとの交差地点より西側では、地山面付近よりの出土が顕著であったが、遺構は確認することができなかった。

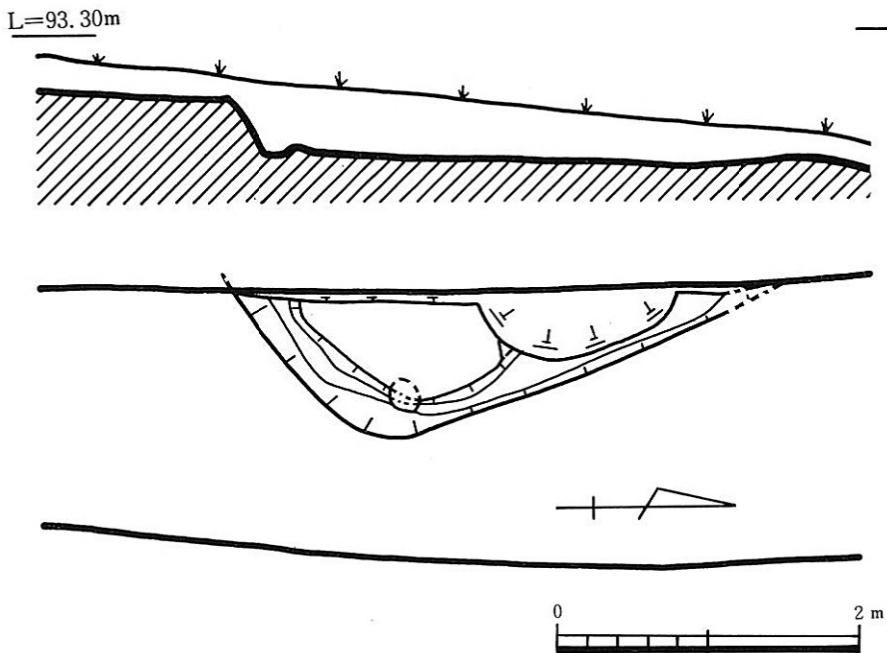
#### No.34地点

叡福寺裏山のチンチの森から北と西に大きく伸びる尾根があるが、このうちの西側に伸びる尾根はチンチの森の西方約300m付近で北へ向きを変える。この向きの変わる付近の稜線上と少し北の斜面に2つ連ねて設定した。現状はブドウ園である。

#### No.34—1 トレンチ

尾根頂部付近に、幅1.5m、長さ18.0mの規模で南北方向にむけて設定したトレンチである。標高は、最高所で約93mである。

基本的な層序は、表土と暗褐色土が約20cmの厚さで堆積しており、その下はやや粘性の明褐色砂質土の地山となる。トレンチ北部、頂部からやや斜面にかかる部分で落ち込みが検出された。この落ち込みは、おおよそ平坦な床面を持ち、壁が10~30cm立ち上がり、壁にそって浅い周溝を持つものである。トレンチ内では柱穴等を検出できなかったが、1辺2.5m以上の方形の竪穴住居跡（1号住居跡）と考えられる。遺物は、この住居跡の埋土内から弥生式土器と思われる小破片が少量出土している。住居跡埋土中の遺物のみでは後期の弥生式土器しか出土していないこと、隣接するNo.34—2 トレンチで検出した円形の竪穴住居跡が弥生時代後期のものであること、更に当西山地区と谷をはさんで存在した東山遺跡において、弥生時代後期の竪穴住居跡の平面プランが円形→方<sup>〈注1〉</sup>形へ変遷したことなどから見て、1号住居跡も弥生時代後期



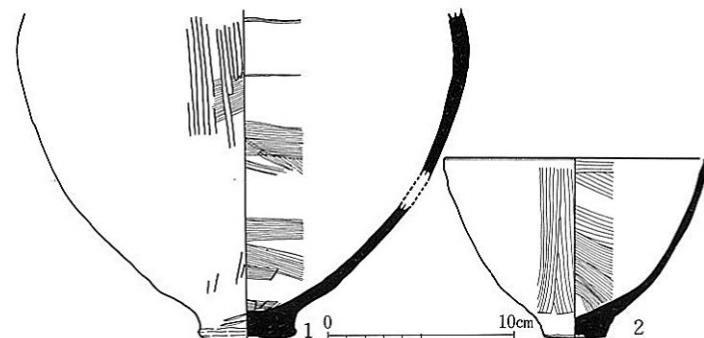
第16図 No.34-1 トレンチ1号住居跡実測図

の所産としたい。

1号住居跡出土の遺物に図示できるものはなかったが、トレンチ北端、即ち1号住居跡の北約3mの地点で、ややまとまった状態で弥生式土器が出土した。1つは鉢形土器で、もう1つは壺形土器になるものと思われる（第17図）。

壺形土器（第17図-1）は口頸部を欠くが、現在高17.5cm、推定復元した胴部最大径24.0cmを測る。胎土は粗粒子を含むが、比較的精良で、焼成も良い。赤味をおびた暗褐色を呈する。外面は刷毛目を施した後、ヘラ磨きを加えている。内面は接合痕が観察できるが、全面に刷毛目調整を施している。

鉢形土器（第17図-2）は復元口径14.0cm、高さ9.6cmの小



第17図 No.34-1 トレンチ出土遺物実測図

型の鉢である。胎土は壺形土器と似るが、色は淡褐色を呈する。内外面ともに磨滅が激しいが、外面は縦方向の、内面は主に斜め方向の刷毛目が観察できる。

（注1）大阪府教育委員会『河内町東山所在遺跡発掘調査概報』1969.3

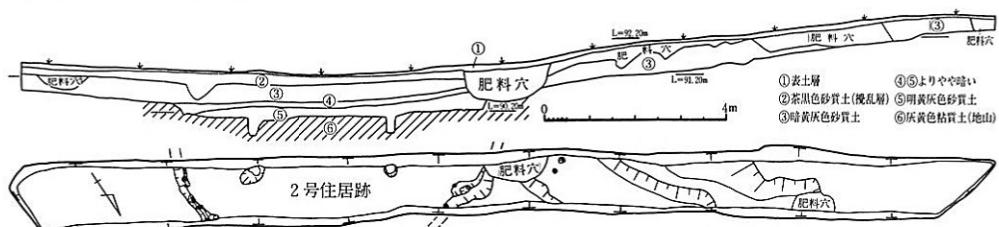
### No.34—2 トレンチ

1 トレンチの南側と、東約50mのところには、比較的ゆるやかな頂部があり、その頂部を結ぶ稜線より少し北側の緩傾斜地に設定した。トレンチは、長さ21.5m、幅1.5mで標高は北端で92.8m、南端で91.6mである。

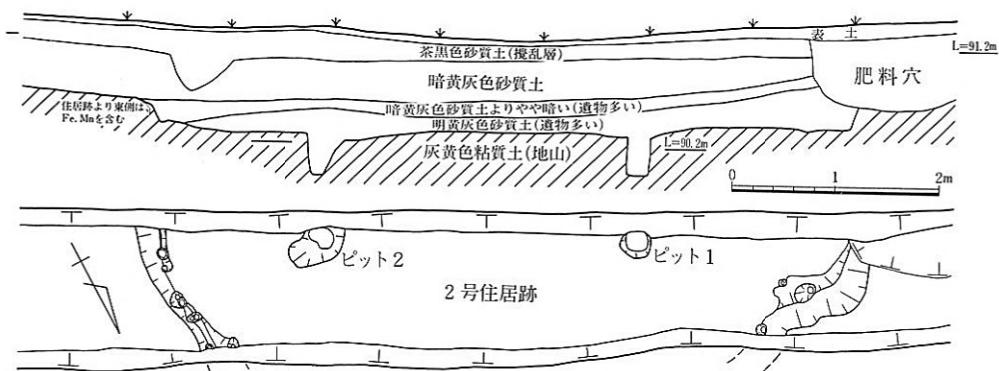
地山面までの基本的な層序は、トレンチ北部では表土、暗黃灰色砂質土の順に堆積するが、南部では表土、茶黒色砂質土、暗黃灰色砂質土の順に堆積し、竪穴住居跡を検出した灰黃色粘質土の地山面となる。

地山面は、北端より3度階段状のテラスがつき、最もレベルの下った所で竪穴住居跡（2号住居跡）を検出した。住居跡は、南側では約20cm、北側では約30cm地山面を掘り込んでおり、内部には住居跡外の地山面上に堆積する暗黃灰色砂質土よりやや暗い層、明黃灰色砂質土の順で堆積がみられた。住居跡の床面は、若干の高低はあるものの、ほぼ平らにつくられており、中央寄りのところで家屋の主柱と考えられる2個の柱穴、南側周辺部では小溝と6個の小柱穴、北側周辺部では3個の小柱穴を検出した。中央付近の2個の柱穴のうち、北側の柱穴（ピット1）は直径25cmの平面円形で深さは約40cm、南側の柱穴（ピット2）は長径60cm、短径40cmの平面橢円形で、深さは約35cmである。小溝は幅約10～15cm、深さ5cm、南北両周辺部の小柱穴は、垂直なものや、少し傾斜のついたものがみられ、直径、深さ共に数cm～10数cmの小さなものが多い。

住居跡の規模をその輪郭より推測すると、直径7m近くの円形プランを有するものと思われる。



第18図 No.34—2 トレンチ実測図



第19図 No.34-2 トレンチ 2号住居跡実測図

遺物は、表土より地山面までの各層にわたって含まれており、後期の弥生式土器が殆んどであるが、上層部では羽釜片、須恵器片、風化の著しい石核が各1個ずつ出土した。

弥生式土器の出土は、地山面上の暗黄灰色砂質土と住居跡内で特に多く、

器形は壺形土器(第21図・1~6)、甕

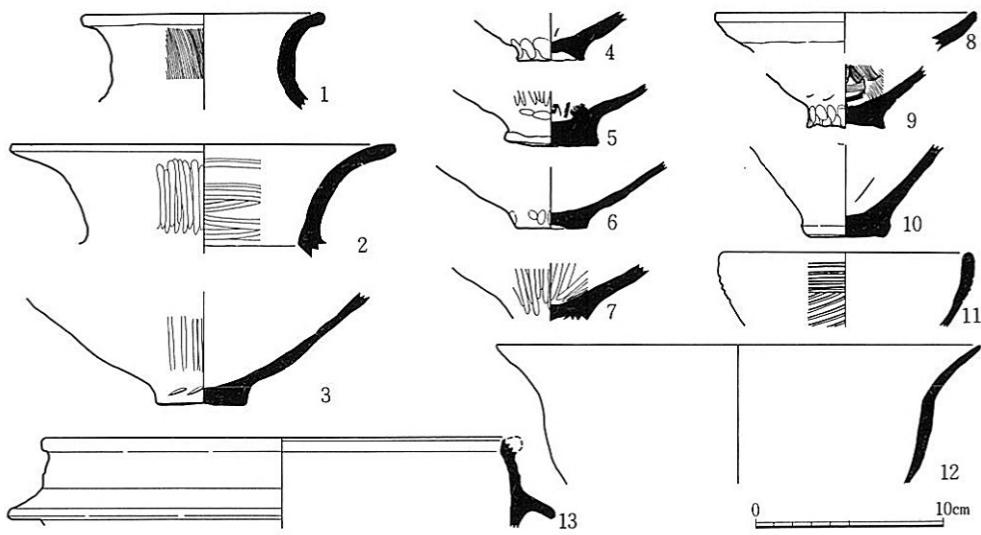
形土器(8~10)、鉢形土器(11~12)、高杯形土器(7)などである。出土土器に共通する特徴は、胎土に砂粒を少し含み、器壁の風化が激しいことである。壺形土器は、外面にヘラ磨きを施したもの(2・3)や刷毛目で仕上げたもの(1)がみられ、甕形土器は、小さな底部が多くてその詳細は不明であるが、外面にヘラ磨きを施したもの(5)ナデによるもの(9)、内面を刷毛目により整形したもの(9)などがある。鉢形土器は、大(12)、小(11)の2種類があり、小の外面には叩きを施す。高杯形土器は杯の下半で、内外面共にヘラ磨きによって仕上げている。

#### No.42地点

聖徳太子墓に比定されている古墳の裏山にあたる五字ヶ峰の北約100m、No.34地点からは東へ約250mの地点で、通称チンチの森と称されている一帯である。調査地である尾根頂部は標高約100mで、現在みかん畑となっている。



第20図 2号住居跡内ピット1



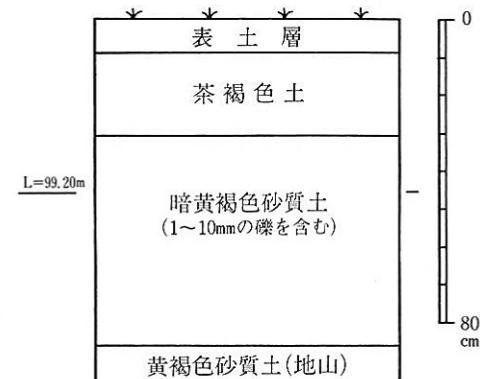
第21図 No.34-2 トレンチ出土遺物実測図

このみかん畑の中の尾根稜線部の平坦地に  $1\text{m} \times 1\text{m}$  の規模のトレンチを12ヶ所に設定した(No.42-1～12トレンチ)。また、みかん畑の西を区切る形で、南北に農道が走っているが、みかん畑と農道の落差部分を利用して断面観察する為に幅0.5m、長さ66.5mのNo.42-13トレンチを設定した。

#### No.42-1～12 トレンチ

叡福寺裏山の五字ヶ峰より北に延びる尾根の稜線部から東側の斜面にかけて、のみかん園に、 $1\text{m} \times 1\text{m}$  のトレンチを12ヶ所設定した。12ヶ所のうち、主稜部にNo.1～5の5ヶ所を北から南へ配し、No.6～12の7ヶ所を東側の尾根の張り出した部に配置した。

各グリッドの地山面までの深さは、主稜線部、尾根張り出し部ともアトランダムで、30～80cmとまちまちであるが、基本的な層序は表土、茶褐色土、暗黄褐色砂、そして地山の黄褐色の砂質土となる。12ヶ所のトレンチのうち、過半数は肥料穴等による攪乱を受けており、地山面では、みかんの根による



第22図 No.42-1 トレンチ断面模式図

と思われる凹凸が各所でみられた。

遺構、遺物はトレンチ自体の規模が小さい上に攪乱を受けていた為に、認められなかった。

#### No.42-13 トレンチ

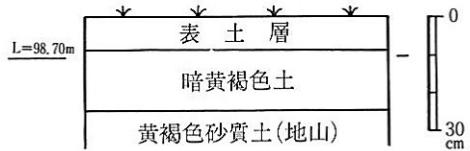
基本的な層序は、厚さ20~50cmの表土・暗褐色土があって、その下は地山となる。地山の質は均一ではなく、農道交差点より北へ58mの地点から北側はもうい褐色砂礫層であり、58mの地点から同じく40m地点までは褐色シルト質、40m地点より以南は比較的固い砂礫層となっている。

農道交差点から北へ約49m地点で最も深く、傾斜のゆるい落ち込み状の断面が観察できた。幅は約5.5mである。最深部は地表から1mの深さを測る。埋土は淡褐色の砂礫層である。（第25図）

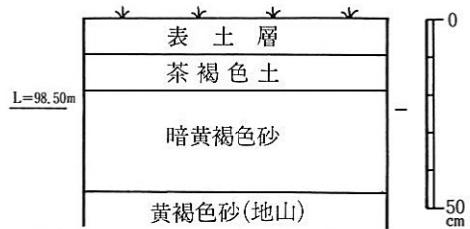
遺物はこの付近でいくつか出土しているが、確実に落ち込み状を呈する部分から出土したとは言いきれない。地形的に見て、現地表もこの付近が低くなってしまっており、小谷部が埋まった可能性が大きいが、溝等の遺構の疑いも完全に捨てることはできないと思われる。

当該トレンチから出土した遺物は、ビニール袋1袋ぐらいで、全て弥生式土器である。また、当該地点東西の斜面から多くの弥生式土器片が採集された。時期のわかるものは全て後期のものと思われる（第26図）。

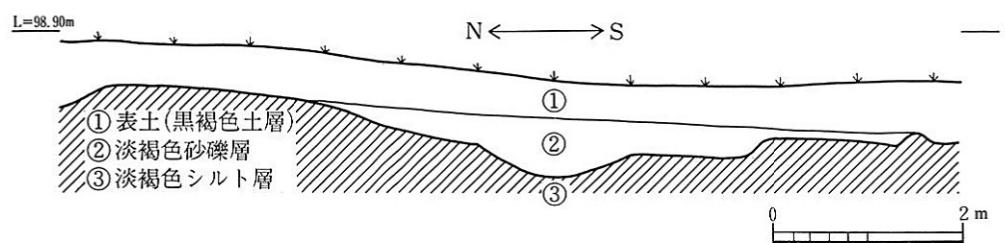
No.42-13 トレンチから出土したのは（3）と（7）である。（3）は小破片だ



第23図 No.42-5 トレンチ断面模式図



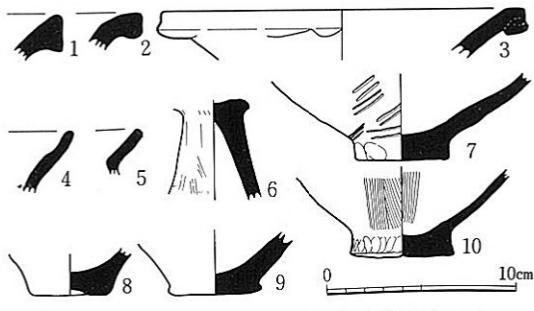
第24図 No.42-10 トレンチ断面模式図



第25図 No.42-13 トレンチ断面実測図（部分）

が、器台と考えた。胎土は比較的精良で、淡褐色を呈している。表面が磨滅しているため調査は不明である。(7)は外面に叩きが認められるが、胴部のカーブからすると壺形土器のようでもある。

他はすべて表面採集である。全てにわたって、胎土には粗粒子を含み、淡褐色または赤味がかった褐色を呈する。高杯脚部(6)には刷毛目が認められる。



第26図 №.42-13トレンチ出土遺物(3,7),  
№.42地点表面採集遺物実測図

## [V] まとめ

今回の試掘調査は、大阪府文化財分布図に印された太子町の№34、36、37、38、42の遺物散布地点に焦点をあて実施したものであるが、№34・37の2ヶ所、3トレンチでは遺構を、№38、42の2ヶ所、3トレンチでは比較的多くの遺物が出土した。

№.34—1・2トレンチでは弥生時代後期の遺物と共に円形と方形の竪穴住居跡の検出をみた。1トレンチの方形住居跡は埋没深度が浅いため攪乱を受けていたが、2トレンチの円形住居跡は埋没深度も約1mと深く、ほぼ完存の状態であった。ただ今回の試掘調査では、調査面積が狭かったために、多くは土中に埋れており、現地の地形から察して、隣接の丘陵部にも広げた調査が必要であると考える。

№.37—1トレンチは、弥生時代後期の遺物を含む2個のピットを検出したが、地山面と遺構内に堆積した土質が極めてよく似ている為、再精査の結果検出したものである。このトレンチ近辺の東斜面では、トレンチ内の遺物と同時期遺物を多数表面採集したが、当トレンチの出土遺物が比較的少なかったことをあわせて考えると、開墾時に尾根上部が一部削られて下部に押し流されたことが考えられる。

№.38—1・2トレンチはトレンチ全体よりほぼまんべんなく遺物を検出した

が、2トレンチの一部では地山面より比較的まとまった弥生時代後期の遺物が出土した。遺構の検出は今回の調査では無かったが、このようなまとまった遺物の出土状態から、近辺における遺構の残存も十分考えられる。

No.42地点は、No.13トレンチでのみ遺物を検出し、他の12ヶ所のトレンチでは遺物、遺構の検出は無かった。これは、当地区の調査面積が他地区と比較して余りにも狭かったことが一因として考えられる。付け加えるならば、過去において当地の俗称であるチンチの森出土とされる河南高校所蔵の後期弥生式土器が存在し、東、西の尾根斜面では多数の遺物を表面採集した。これらの状況を付け加えると、当地区においても遺構の存在は十分考えられる。

No.36—1～6トレンチは、2トレンチより土器片が2個出土しただけで、遺構の検出はなかった。当地区は、大阪府文化財分布図の上では、太子町のNo.36地点散布地として印されているが、その内容を記入した大阪府文化財地名表の太子町No.36地点の項には、No.37地点と尾根稜線を挟んだ西斜面と書かれている。以上のことから、この付近の弥生時代遺跡はNo.37付近で終り、No.36—1～6トレンチを設定した付近には存在しなかったと考えられる。なおNo.36—1～6トレンチを設定した尾根は上の太子方面へ延びているが、標高約70mをきるあたりより北方では、サヌカイトの散布がみられることから、注意を要する。

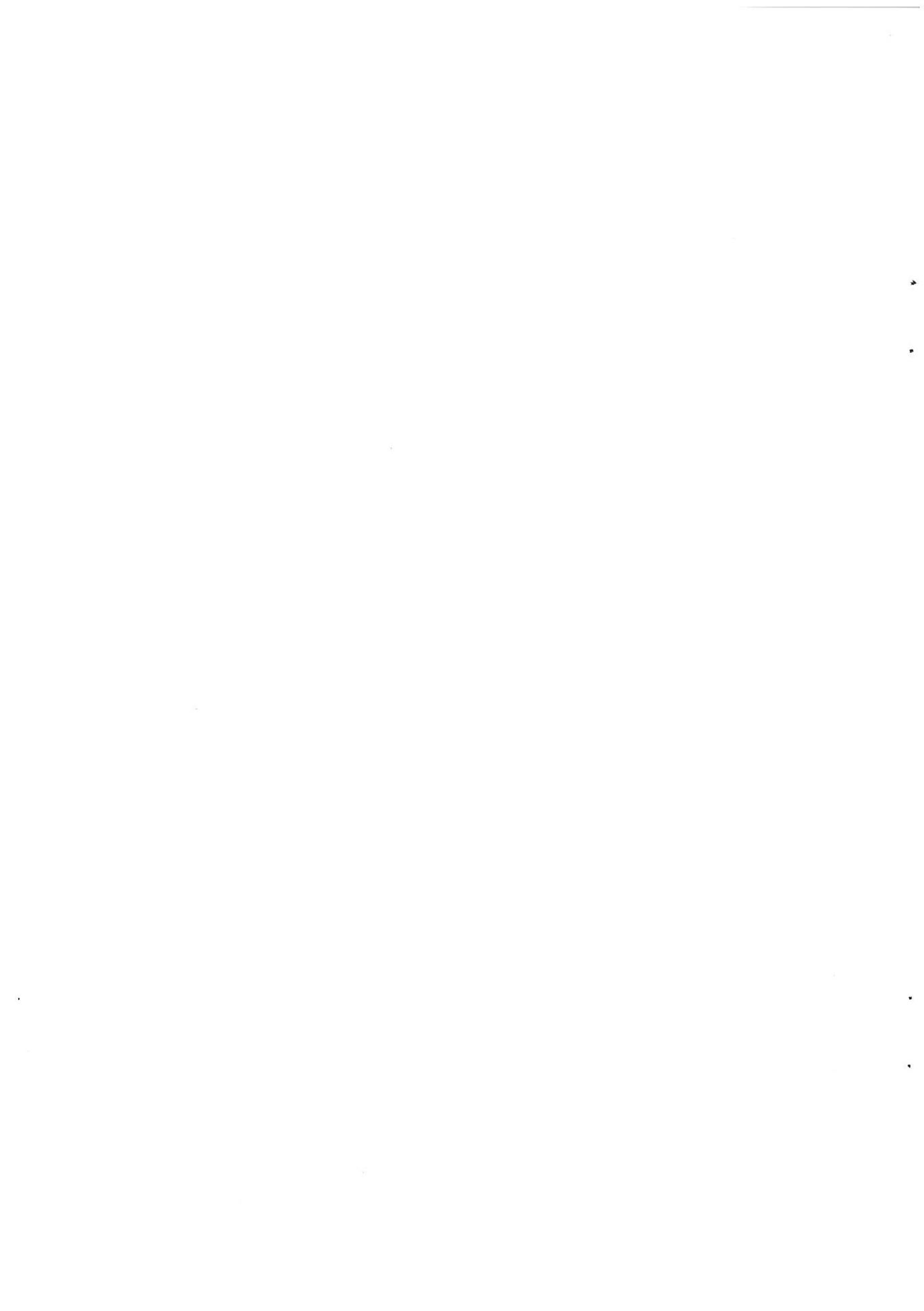
また、今回の区画整理事業予定地外ではあるが、No.34—1トレンチ北西約250m付近の地域や、五字ヶ峯西斜面付近でも遺物が表面採集された。採集遺物は、No.34—1トレンチ北西の散布地では、後期の弥生式土器が殆んどを占めるが、生駒山西麓産出といわれる土器片も少量みられた。また、五字ヶ峯西斜面散布地は、全てが後期の弥生式土器である。

以上、今回の調査ではNo.34、37、38、42等の尾根の稜線部を中心にして遺跡の存在を推測し得るが、更に大阪府文化財分布図に記されている様に、周辺にかなり広範囲に点在して遺跡が広がっている可能性は極めて大きく、当調査地の南約2kmで発掘調査によって竪穴住居跡が多数検出され、高地性の遺跡としてその名が知られた東山遺跡に匹敵する集落が存在する可能性も大きい。

しかし、一方では、当該地域一帯が、古くからの果樹園経営等のためかなり

開墾、削平されていることも事実である。

今回の調査で、それらを含めて遺跡の範囲を明確にすることは困難であって、  
そうした範囲を確定するためには、新たな調査が必要と思われる。



# 図 版



No.36-1・2 トレンチ(西から)



No.36. 37. 38地点(東から)



No.34地点(東南から)



No.42地点(北西から)



No.36-1 トレンチ



No.36-2 トレンチ

No.  
36  
—  
3 · 4 トレンチ



No.36-3 トレンチ



No.36-4 トレンチ



No.36-5 トレンチ



No.36-6 トレンチ



No.37-1 トレンチ



No.37-1 トレンチ落ち込み



No.38-1 トレンチ



No.38-2 トレンチ



No.34-1 トレンチ



1号住居跡



No.34-2 トレンチ



2号住居跡

No.42-1  
トレンチ



No.42-5  
トレンチ



No.42-11  
トレンチ





No.42-13 トレンチ



No.42-13 トレンチ

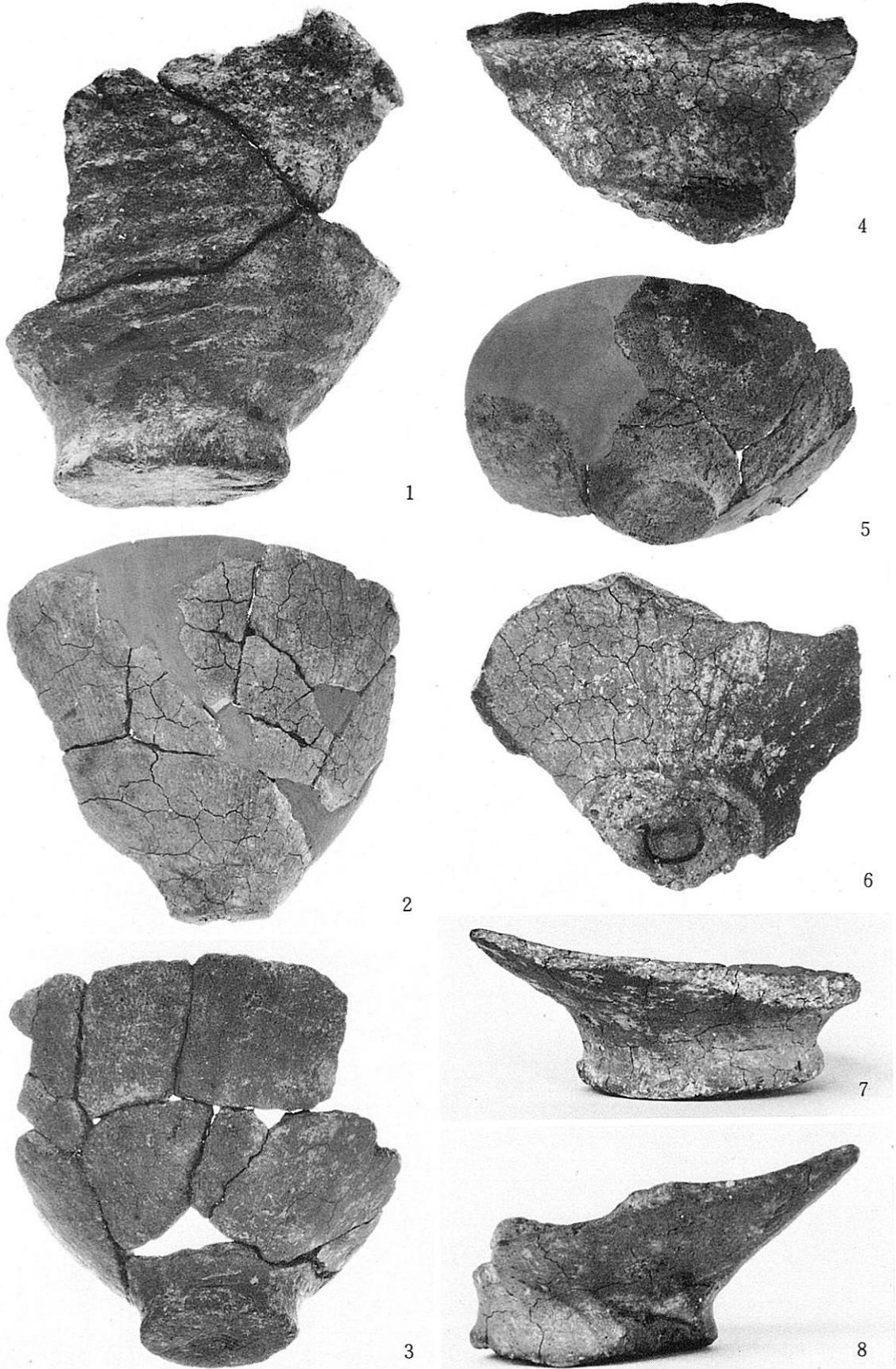
図版一二 No.37・38地点出土・表面採集遺物



No.37地点表面採集遺物

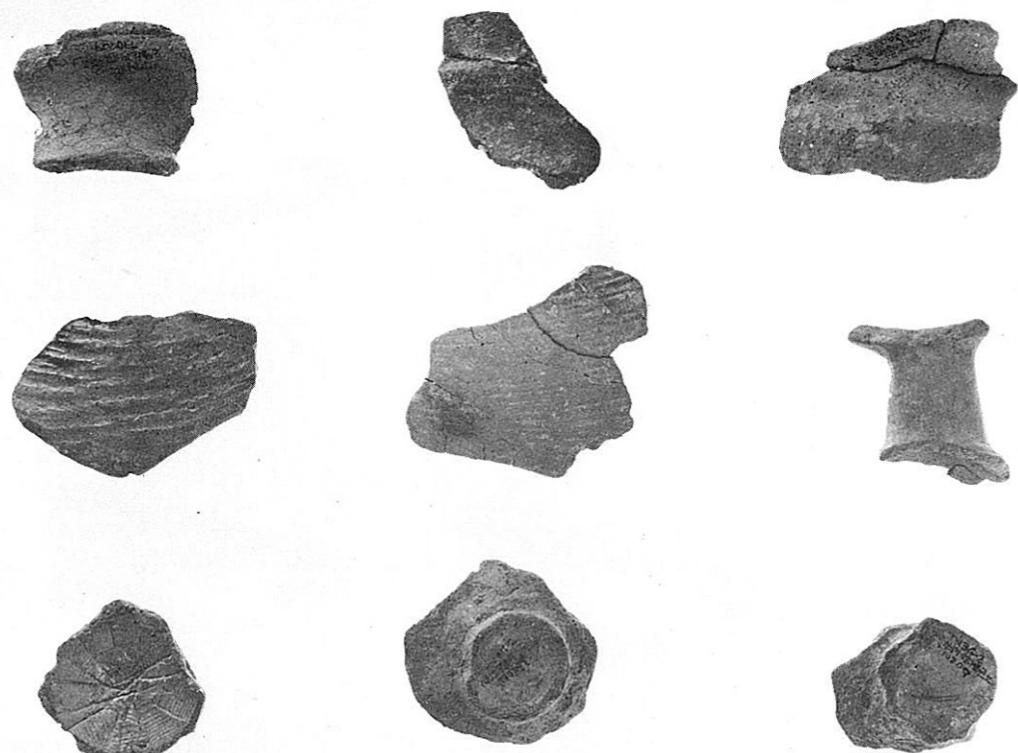


No.38-1・2トレンチ出土遺物

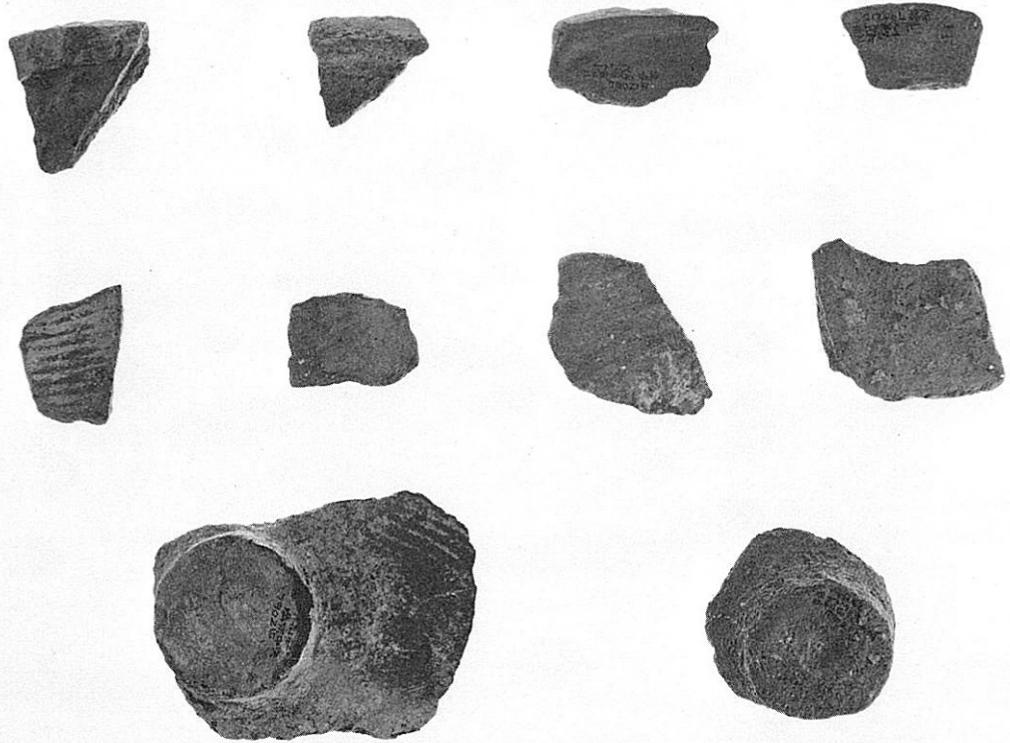


(1) - No.38-1トレンチ出土 (2.3) - No.34-1トレンチ出土 (4~8) - No.34-2トレンチ 2号住居跡出土

図版一四  
No. 34 · 42 地点出土・表面採集遺物



No.34-2 トレンチ出土遺物



No.42-13 トレンチ出土(左上、左下) 表面採集遺物